

ひょうごの 遺跡

114号

(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 兵庫県立考古博物館内 TEL.079-437-5561 FAX.079-437-5591 URL:<https://www.hyogo-ctc.or.jp/>

令和8年度発掘調査成果速報

しもたきの おくぜ
下滝野・奥瀬遺跡(加東市)
～中世滝野荘の中心的集落～
～発見! 縄文時代のドングリとムシ～

どうがっぱ
堂ヶ坪遺跡(豊岡市)
～2つの谷から飛鳥時代から鎌倉時代の土器や木製品が出土～

にしわきじょうせき
西脇城跡(西脇市)
～ついに姿を現した西脇の中心部～

かいばらはんじん や あと
柏原藩陣屋跡(丹波市)
～柏原藩の藩校、「そうこうかん崇廣館」講堂を発見!～



出土したドングリ(左)・昆虫(右)

コラム 公開活用の現場から
— 柏原藩陣屋跡 —

下滝野・奥瀬遺跡の袋状土坑発掘状況

～中世滝野荘の中心的集落～

しもたきの おくぜ
下滝野・奥瀬遺跡（加東市下滝野）

動画はこちらから

下滝野・奥瀬遺跡は加古川中流域西岸の段丘面^{だんきゅう}に立地しています。これまで、加東市教育委員会による調査が5次にわたって行われており、今回、滝野小中一貫校の新校舎建設に先立ち、約 6,000 m²を対象に発掘調査を行いました（写真①）。調査では中世の遺構・遺物を中心に、古代の遺物や縄文時代の土坑といった多様な時代の痕跡を確認しました。ここでは、主に中世の成果について紹介します。

中世集落の様相

今回の調査では、掘立柱建物跡、井戸、区画溝、水田、炉跡などの遺構が見つかりました。これらは主に平安時代後期～室町時代（中世）のものです。

調査区中央では、北西－南東方向に並行する2条の溝（SD19・26）と、それに直

交する1条の溝（SD20）が見つかりました（写真②）。集落はこれらの人工的な溝や自然地形によって、居住域、水田域、炉跡が伴う工房の各エリアに区分されていたようです（図1）。

居住域の建物と井戸

区画溝の北東側の居住域では、溝の方向に沿う柱穴群や掘立柱建物跡1棟（SB01）、石組みで構築された井戸（SE67）が見つかりました。井戸の底には^{まげもの}曲物が据えられ（写真③）、埋土からは「^{きゅうきゅうによりつりょう}急々（如）律令」（まじないの定型句）と記された^{じゅふもっかん}呪符木簡が出土しました。これらの木簡は井戸廃絶時の祭祀に用いられたと考えられます。

生産に関わる遺構

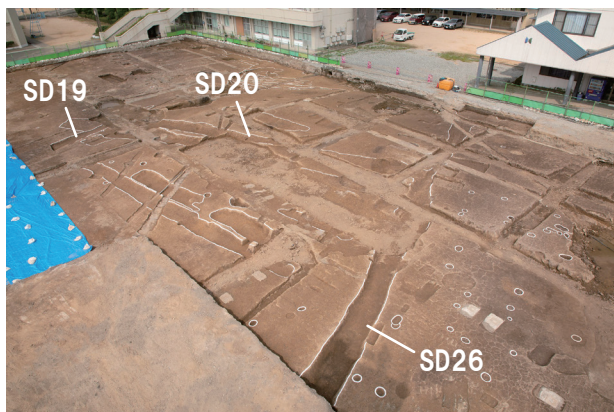
区画溝の南西側では、炉跡3基が見つかりました。そのうち、SX367は中央に長



写真① 調査区全景（南東から）



写真③ 中世の井戸（SE67）



写真② 中世の区画溝（南東から）



写真④ 炉跡（SX367）

さ3 mほどの燃焼部を有しており、複数回の火入れを示す炭層が残されていました(写真④)。別の炉跡(SX221)では上下2段の炉構造が確認され、継続的に炉作業が行われたと想定されます。遺跡内からはろへき炉壁やフイゴの羽口(炉に送風する土製の管)などの鍛冶関連遺物も出土しているため、これらの炉跡は鍛冶生産に関わる遺構の可能性あります。

また、調査区南東部に広がる低地部では水田遺構が検出され、畦畔が幅約1.0 mの狭い間隔で並行して行っていました(写真⑤)。



写真⑤ 水田遺構

滝野荘の中心的集落

滝野地域には、中世を通じて「滝野荘」と呼ばれる荘園が存在し、摂関家藤原氏ゆかりの勧学院の領地であったと伝えられています。

周辺には滝野荘に関連すると想定される遺跡が複数あります。本遺跡に隣接する下滝野・下ノ山遺跡では廂を有する大型建物跡が確認され、周辺に公的施設が存在したと指摘されています。北東に位置する上滝野・宮ノ前遺跡でも、道路状遺構や墨書土器、硯といった遺物が見つかり、荘園の中心機能を担った遺跡と推定されています。本遺跡もこれらの遺跡同様、滝野荘の中心地の一角となるような、居住域と生産域が明確に区分された計画的な中世集落であったと考えられます。

今回の調査により、滝野地域における中世集落の形成や生産活動の実態を具体的に示す多くの成果を得ることができました。

(調査第2課 垣内 翼)

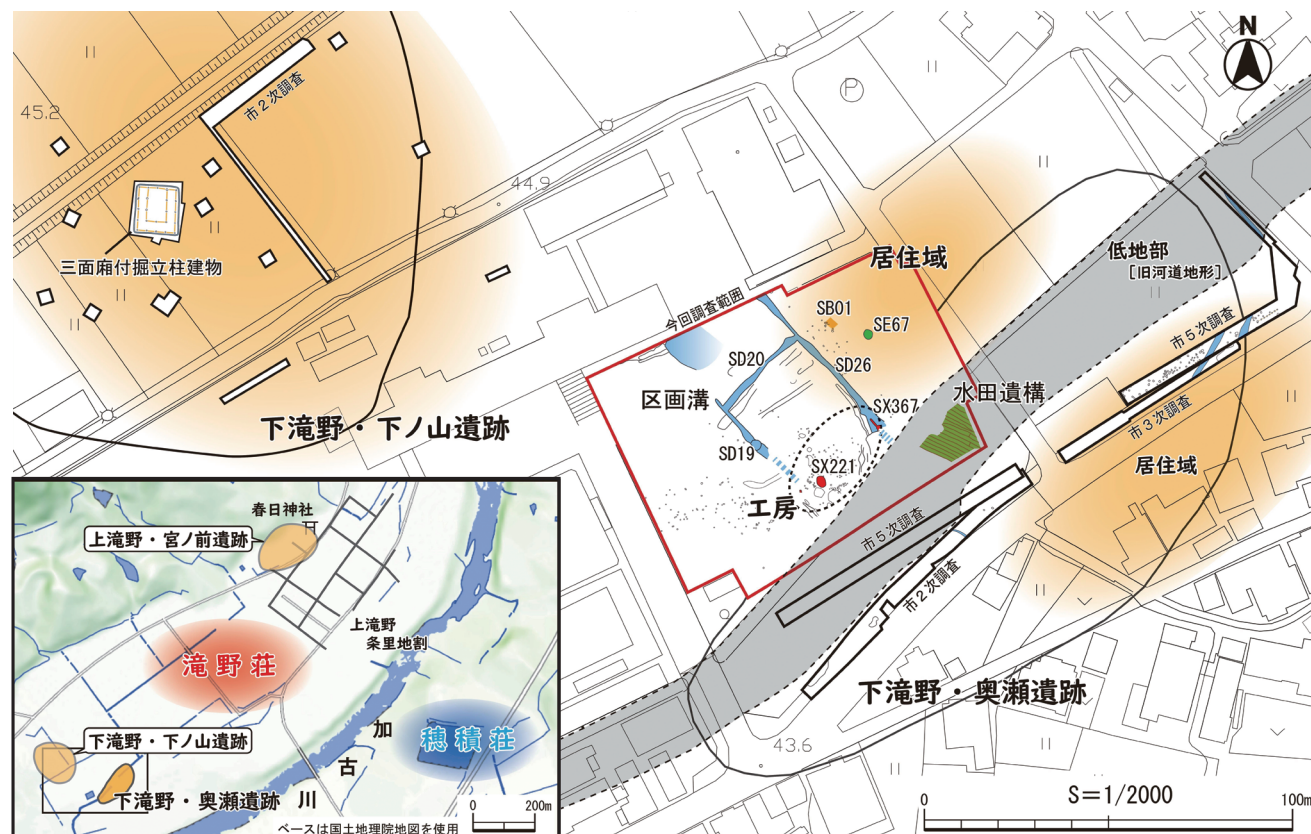


図1 調査成果に基づく遺跡周辺の様相

～発見！縄文時代のドングリとムシ～

下滝野・奥瀬遺跡（加東市下滝野）

下滝野・奥瀬遺跡の調査区南東隅の、周囲より高さが約2 m低い低湿地部で、袋状土坑^{どこう}5基が見つかりました（写真①）。袋状土坑は上から見るとほぼ円形で、断面を見ると下部がフラスコ状に広がる形に掘られています（写真②）。縄文時代後・晩期の土器が出土しました。

袋状土坑は、主にドングリを貯蔵するための穴で、今回見つかった1基では、ドングリがギッシリと残っていました（写真③）。他の3基でも、穴の底に少量のドングリ^{ちょぞう}が取り残されていました。

袋状土坑が掘られていた高さは発掘中も常に水が湧いていたので、縄文時代にも水につかっていたかもしれません。当時の人々は食用のために集めたドングリを水づけ^{ぼうちゅう}にして、防虫を期待したのでしょう。

袋状土坑の埋土には葉や枝の集積層がいくつかありましたが、多くは自然に溜まったものと考えられます。また、埋土中には多数の昆虫遺体や種子などが含まれていました（写真④）。昆虫や種子の同定作業を行うことで、季節性や食生活、当時の自然環境が明らかになるかもしれません。

低湿地部以外では縄文時代の遺構は見つかりませんが、集落跡がそれほど遠くない位置にあると推定されます。

縄文時代の袋状土坑の中でドングリや昆虫が当時の状態をほぼ残したまま見つかったことは、思いがけない発見でした。特に、これほど多くの昆虫を含む遺構は、これまで兵庫県では例がなく、分析を進めることで更に大きな発見があるかもしれません。

（調査第2課 三好元樹）



写真① 低湿地部の袋状土坑（北東から）



写真③ 袋状土坑中のドングリ



写真② 袋状土坑の断面



写真④ 昆虫の遺体

～2つの谷から飛鳥時代から鎌倉時代の土器や木製品が出土～ 堂ヶ坪遺跡（豊岡市戸牧）

堂ヶ坪遺跡は、豊岡市中心部の市街地の南西3kmの谷間に位置します。北近畿豊岡自動車道の延伸に先立つ工事用道路の建設に伴って、緩斜面にある3段の水田で発掘調査を行いました。

調査の結果、古代から中世の集落遺跡と鎌倉時代（12～13世紀）に埋まった2つの谷が見つかりました。奥坂川左岸に沿った南西－北東方向の谷（谷A）に対して、北西方向からの支谷（谷B）が合流していたようです。

谷Bからは飛鳥時代（7世紀）後半の須恵器の大甕おおがめの破片や平安時代中期（10世紀）の黒色土器などとともに、多量の平安時代中期（11世紀）の須恵器が出土しました。とりわけ平安時代中期の須恵器はきしゆ碗ばかりが目立ち、特定の器種に偏る状況から、周辺に須恵器の窯跡が存在した可能性

があります。また、黒色土器がほとんど摩耗していないのに対し、須恵器の碗に摩耗が認められることから、両者の供給元が異なる蓋然性を指摘できます。

一方、谷Aからは少量の平安時代中期（11世紀）の須恵器や鎌倉時代（12～13世紀）の白磁・土師器煮炊具などとともに、奈良時代（8世紀）の須恵器や土師器が多く出土しました。奈良時代の須恵器には日常の食器の他に大甕の破片が多く含まれています。

また、これらの土器の集中する谷埋土の最深部には板材、菰こも（敷物を編むために使うおもり）などの木製品も含まれていました。これらの生活道具から、こちらの谷のすぐ上流には今回の発見とは別の集落が存在していたことが考えられます。

（調査第1課 上田健太郎）



奥坂川左岸の谷（谷A）と北西側から合流する谷（谷B）（谷は黒灰色の部分、南西上空から撮影）

～ついに姿を現した西脇の中心部～

にしわきじょうせき
西脇城跡（西脇市上野）

多可町から流れる杉原川が加古川に合流する地点の周辺には、現在、西脇市の市街地が広がっています。合流地点の北約1km、北の西林寺山^{さいりんじ}から続く段丘の南端に西脇城跡があります。

西脇城跡の石碑が建っている地点の約150m北西に、明治時代の地籍図では東西約110m、南北約100mの四角形の区画があり、そこが西脇城跡の中心と考えられてきました。

今回の調査範囲は約500㎡の小規模なものです。西脇城跡の推定地の北西端にあたります。調査の結果、地籍図の区画とほぼ一致する場所で、幅約6.4mの箱堀（底が平らで断面形が逆台形となる堀）が見つかりました（写真①）。堀は35mにわたり直線的に伸びて、調査範囲外に続きます。深さは約1.4mでしたが、上面は後の

時代に削り取られており、実際はもう少し深かったと考えられます（写真②）。時期を示す遺物は出土しませんでした。堀の形状から16世紀頃に造られたと考えられ、埋没しながら近世以降まで存続しました。

この堀から約4m北東で、並行する別の堀が見つかりました。幅約4.8m、深さ約0.8mで、断面形は皿形です。2つの堀が同時に存在したかを含め関係は不明です。

西脇城跡の南の低地には、西脇城跡の堀と概ね並行する条里制地割（中世以前の土地区画）が残されています。条里と関わりを持ちつつ城の敷地が整備されたことがうかがえます。また西脇城跡からは、加古川と杉原川の合流点、さらには加古川のより下流が見渡せることから、そういった眺望を意識してこの場所が選ばれたと考えられます（写真③）。（調査第2課 三好元樹）



写真① 2つの堀（北西から）



写真② 堀の断面



写真③ 調査地遠景（黄梓部）（北から）

～柏原藩の藩校、「崇廣館」講堂を発見！～ 柏原藩陣屋跡（丹波市柏原町柏原）

柏原藩陣屋跡は、丹波市柏原町柏原に所在し、譲葉山の西麓、奥村川左岸の微高地に立地します。今回、兵庫県柏原総合庁舎の改修工事に伴い発掘調査を実施しました。この発掘調査では、礎石建物、瓦列、埋桶、埋甕などを検出し、幕末に創設された藩校施設の一部が明らかになりました。ここでは、主要な調査成果を紹介します。

「崇廣館」の講堂

崇廣館は安政5（1858）年、陣屋の北西隅に創設されました。校内には土蔵、柔術・槍術稽古場、塾（明治期に新設）があり、中央部分には講堂が配置されていました。

このうち講堂については、創建当時は平屋であったことが判明しており、調査では軒下の縁を支える束石の列が検出されました（図1）。

明治時代初期に講堂が2階建てに改築さ

れて縁は取り払われ、瓦列が雨水排水のために敷設されたと考えられます。

明治時代以降の教育施設

埋桶と埋甕（写真①）は崇廣館内の塾の便槽と考えられます。大正時代には高等女学校の増設に伴い、講堂は移築されましたが、今回の調査地は教育拠点として長く使用され続けたことが確認できました。

（調査第1課 椿野智之）



写真① 埋桶（左）と埋甕（右）

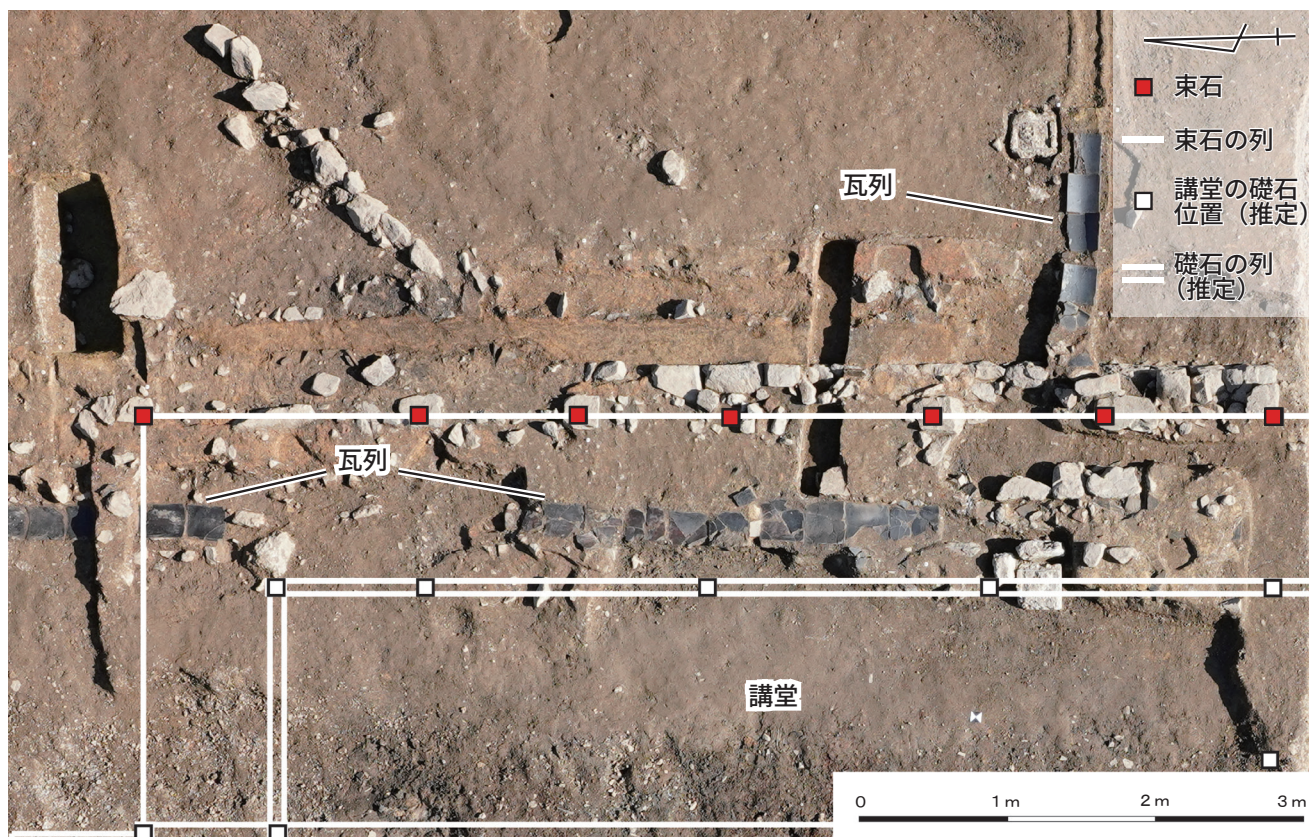


図1 礎石建物と瓦列

コラム 公開活用の現場から — 柏原藩陣屋跡 —

柏原藩陣屋跡（p. 7）の調査成果を多くの人に知ってもらうために行った三つの取り組みをご紹介します。

一つ目は、現地説明会です。1月10日に実施し、地元の方を中心に計123名の参加がありました。調査地内にあった高等女学校について、「母が通った学校」としみじみと語る参加者もいらっしゃいました。

二つ目は、出前授業です。丹波市立崇広そうこう小学校の6年生に向けておこないました。実際の遺物に触れてもらい、どのようなものが出土したかお話ししました。「昔のものがそのままの形で残っているのがすごい」「思ったより重かったりして面白かった」などの感想が寄せられました。

三つ目は、柏原藩陣屋での展示です。丹波市教育委員会主催の展示室に、写真パネルなどを設置

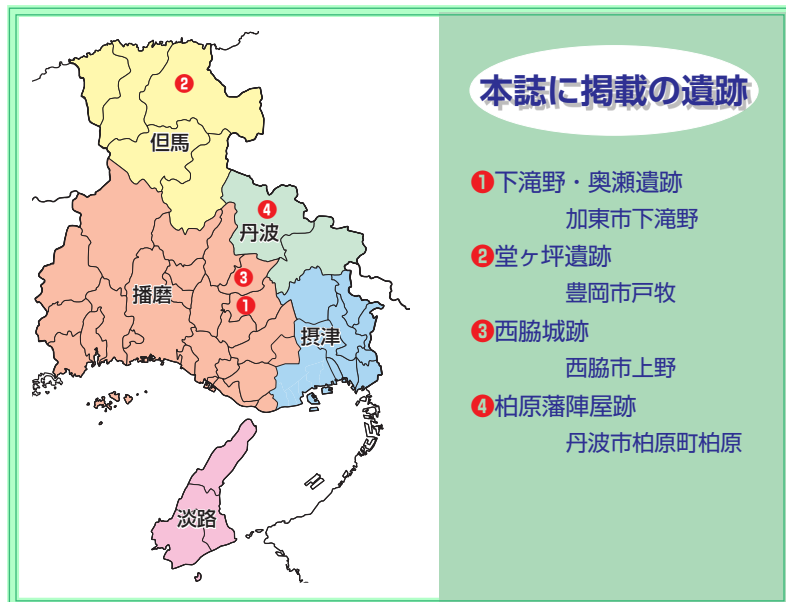
しました。来場された方は、「こんな貴重なものが見つかったんだ」と感心していました。

「崇廣館」の名は小学校にも受け継がれており、地元での関心の高さを改めて感じる事が出来ました。地元の知られざる魅力をこれからも掘り起こし、より多くの地域の皆様にお届けできるよう、様々な形で公開活用に取り組んでいきます。

（調査第1課 椿野智之）



出前授業の様子



本誌で紹介する遺跡の遺物が、発掘調査速報展にて展示されます。

編集後記

本号では、令和7年度に発掘調査を実施した縄文時代から江戸時代の遺跡や、教育普及への取り組みを紹介しています。

今年度も様々な遺跡の調査が予定されています。次号でも最新の成果をご紹介しますので、ご期待ください（調査課 野島悠之）

『ひょうごの遺跡』バックナンバー

1～82号
考古博物館HP

83号～
CTCHP



公益財団法人 兵庫県まちづくり技術センター
Hyogo Construction Technology Center for Regional Development